

第一節 神社

一、諏訪神社（旧桃川村社） 鎮座地・桃川 下分

◎祭神 武御名方神（主神） 豊受姫神 大山祇神 菅原道真公

◎例祭 * 祈年祭（春祭 二月十一日）

* 祇園祭（夏祭 八月一日）

* 秋季例大祭（十月二十三日）

↓【前夕の宵宮祭で特殊神事「注連縄切り」齋行。別記】

* 新嘗祭

（十一月二十三日）

その他 元旦祭、田
祈禱、お火たき（古神

札焼納）、除夜祭など

◎社殿 本殿は銅板葺流造、拝殿は瓦葺入母屋造

◆平成九年に本殿屋根柿葺を銅板葺に改修。

同年、境内社「天満宮」の社殿新築。



◎由緒 神社に二枚の棟札が保存されていて、古い方の札の表面に『奉造立武御名方神寶殿 継体天皇即位廿一年』、裏面に『奉再造文武天皇二戌年 神主中野山代正』と書かれています。この棟札は中野氏（後記）の時代（永祿年間・一五六〇年代）に作製され、その際に過去の記録をもとにこれら二つの築造年銘を記したものだと思われまます。

継体・文武朝は六、七世紀の世であり、棟札のほかに年銘を確認する資料はありませんが、神社の創建（諏訪信仰）はかなり遠い往昔のことと考えられます。（歴史編参照）

新しい方の棟札には『奉再造諏訪大明神宮一字 文化六己巳年 大旦那松平肥前守殿 武雄安龍院覚隆法印』などの文字があり、文化六年（一八〇九）当時の神社の歴史を物語っています。

*肥前守 佐賀九代藩主 齊直公 *法印 修験社僧（当時、真言修験道の僧が神職を兼務）

藩政時代、桃川は佐賀・唐津兩

藩の境目に位置し、諏訪神社は

「藩境鎮護の神社」として佐賀歴

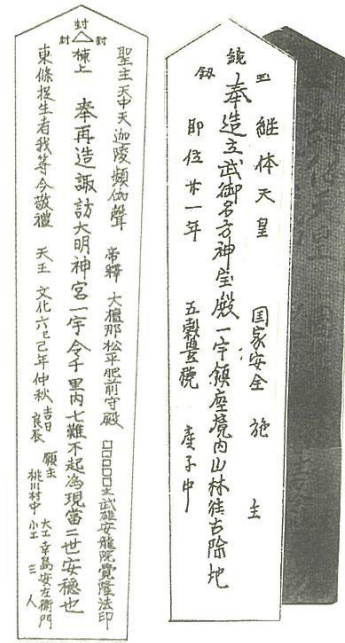
代藩主の厚い崇敬をうけてきまし

た。今も境内一隅に「佐賀二代城

主松平丹後守光茂公御勸請之古跡

也」と刻まれた事跡祠（明治期建

立）も残されています。



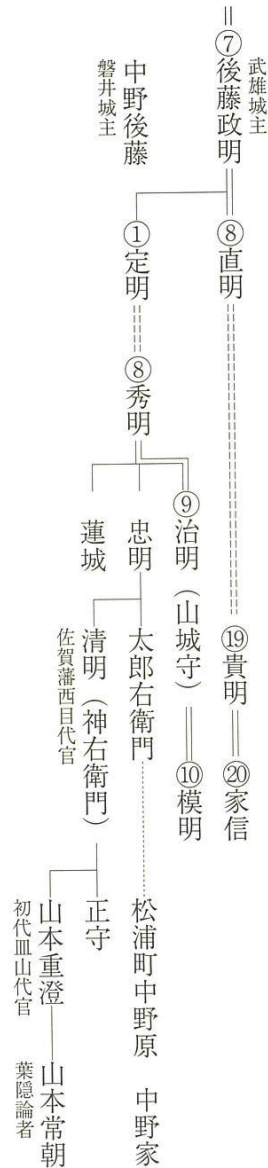
諏訪神社棟札

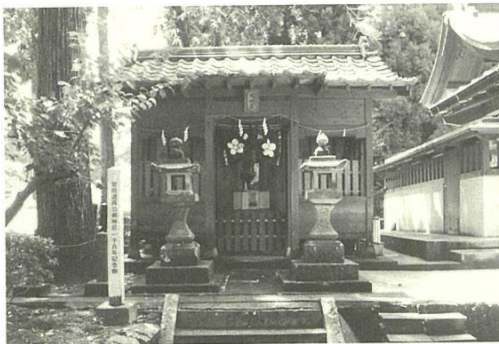
神社は以前、藩境の松浦川畔に鎮座されていましたが、人里離れて保全が行き届かなかったため、文化四年に現在地へ遷座されました。元の社地周辺を今では古宮（字名）と呼んでいます。

◎主神、武（建）御名方神はわが国最古の史書「古事記」に登場する神で、父神・大国主命を輔けて日本の国造りの大業に力を尽くした神です。農耕、風水、開拓の神として、また中世以降は「日本第一大武神」として武家集団の尊崇をうけました。本社は信濃の国（長野県）の諏訪大社です。

※中野山代正は中野山城守とも記されていて、武雄城主後藤家の分家である中野後藤家の第九代領主で名を治明と言いました。永祿年間の領主で領内一円に神徳を宣揚しました。

後年、甥の中野神右衛門清明は佐賀藩西目代官として桃川に居住し、その子重澄（山本家養子）は初代皿山（有田）代官となり、さらにその子の山本常朝は有名な「葉隠」を著しました。





境内社 天満宮

* 拜殿内に天保年間の大絵馬二掛が奉納されていて貴重な文化財です。

* また境内には明治二七年設置の雨乞亀石があります。〔歴史編〕

* 境内社「天満宮」には明治以降に合祀された五座の石祠があり、中央の石祠には「菅公木造座像」が安置され、台座に「慶応二年奉彩色」の文字があります。



境内中央の大楠

* 参道入口には高さ一丈二尺の大燈籠一対が奉納されていてその竿石に「明治二十九年宿浦 瓶山浮立中」の銘があり、当時の盛んな浮立舞がしのべれます。

* 境内中央に樹高三〇メートルの大楠が茂っていて幹廻り五・一メートル、枝張り十二メートルで樹齢は三〇〇年と推定され、神社や桃川集落の歴史を見守りつづけています。ほかにもう一本のクスやシラカシ（共に樹齢二〇〇年）、モミの木、モミジなど数多くの古木が鎮守の森を形づくっています。

◎奉献建造物 記念物等

* 参道入口の大鳥居は平成十九年に建て替えられました。旧鳥居（明治三四年建立）は解体して境内の一隅に保存されています。文化年間から掲げられていた社額（香川景樹書）は拜殿内に保管されています。

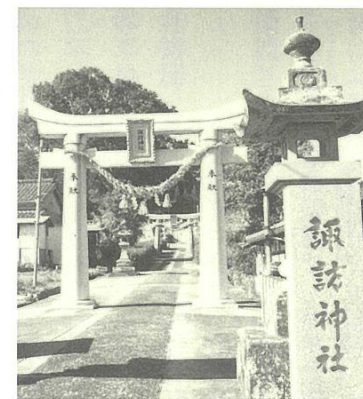


香川景樹は江戸後期に活躍した京都桂園派の高名な歌人・書家でした。当時、その名声が天下に広まったといわれる人物の書が桃川の諏訪神社に掲げられたことについては、その門人の一人である古川松根を介して入手できたものと推察されています。古川松根は藩主鍋島直正の近習頭をとめ、弘化のころ桂園に入門し、四条派と呼ばれる画風をもち、大川内山の鍋島藩窯の下絵はほとんど松根意匠画と言われています。当時の記録によると桃川村から年々百石以上の米が御細工人の扶持米として大川内山に送られており、その関係によるものと思われる。



旧社額

旧鳥居刻字



平成19年建立の新鳥居

【伝統特殊神事「注連縄切り」の事】

諏訪神社の秋季例祭前夜の宵宮祭で「しめ縄切り」という神事が近くの峠で約二百年近くつづけられています。

峠の入口に張られ、一年間集落を守ってくれた「しめ縄」を切り納める「こと」によって「新しい力の再生、生命の誕生」を願う「神迎え」の神事と考えられますが、次の伝承（民話）によって桃川の先人たちの心豊かな崇敬心を読みとることができます。

『当山派山伏由緒 弘化四年調 安龍院抱宮 松浦郡伊万里郷桃川村宗廟諏訪大明神記 注連縄切由来』（佐賀県立図書館資料室蔵史料）

往古ヨリ村方申伝候由緒左ニ

（原文のまま 傍訓は執筆者）

貴族高位ノ官婦妊娠の俤数人従属シテ来ル何ノ謂共相知候得共鄙

ナラザルニ免リテ村夫打寄七様々界抱シテ滞留ナセ七村境ナル一里塚ノ脇ニ住居ヲ修補居置シニ無程男児誕生アリ成長ノ後神武英才万人ニ秀レ能農民ヲ撫育有シカバ自ラ主人ノ如渴仰シ終焉ノ後諏訪大明神ト崇メ形ノ如ク宮殿ヲ営ミ一村ノ宗廟トシテ神田等寄付シテ毎歲神事叮嚀ニ有之宵ノ祭りニハ誕生ノ松ト申唱一里塚ノ松ヨリ大注連縄ヲ張東ノ方ヨリ通来ル人江七五三縄ヲ切セ通シ候モ古例トシテ其前様々ノ手数有之胞衣ヲ納候所之由乳母祖神ト申唱石祠勧請アリ従属ノ臣之子孫右ノ祭りニ携り供物其外五人ノ者ヨリ相備年繰ニシテ鬮を取り祭家所ヲ極鬮当ノ向工前年ヨ



リ幣帛ヲ送り社僧并五人ノ者其家ニ至リ神酒ヲクミ矩式ヲ行フ靈感挙テ悉シ難トイエ共就中安産ヲ守リ給年々鬮当ノ家ニ懐妊ノ女有シモ誠不思議ト云ベシ星霜數百年ノ今ニ至ル怠転ナク神感赫々トシテ祈願不空方惜哉其源分明ナラズ誠二千歳ノ恨不遇之爾云

この伝承は、いわゆる「若宮王子信仰」、「神人同形説話」の類いと考えられます。またこの由来の中に村境習俗（道切り、道祖神）や出産習俗（胞衣塚、乳道祖神）、宮座習俗などの民俗事象が随所に記述されていて、「神人和楽、神と人との共生」を願った一種の『神遊び』とも考察される貴重な伝承行事です。

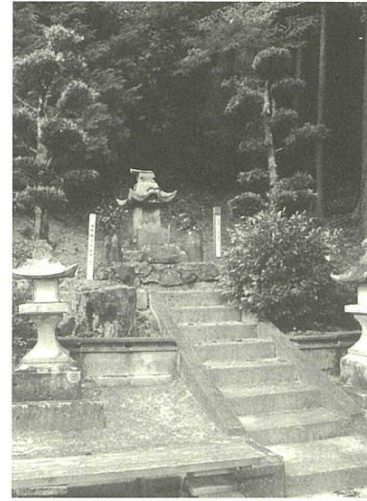
また、この伝承を地区の「氏神信仰」と習合させた次のような説話も残されていて、しめ縄切りを別称「臍の緒切り」とも呼ぶ由来にもなっています。

上古、祭神武御名方神、杵島・松浦境ノ地ニテ神誕アリ、母神須勢理比売御子神ニ初乳ヲ添ヘ給ヒ、帰順ノ神々白酒トコロ山芋ヲ御饌トシテ献上、宮居ヲ建テテ奉斎、ノチ御子神ノ誕生ヲ祝賀シ歳々九月宮居ノ前ニ七五三縄ヲ張り東ヨリ来ル者ニ之ヲ切ラセ神酒ヲ与フ、コレ御子神ノ臍緒切りノ学ビナリ今ニ桃川七五三縄祭ト云ヒ村民古老ノ伝言ヘナリ

◎「しめ縄切り」の当日の様子は「民俗編」に詳述されています。



◎乳道祖神 ちぎやのかみ 石祠之事



「しめ縄切り」神事に関係の深い撰社^{せんしゃ}「乳道祖神祠」は東分の鹿路峠^{ろくろ}に奉祀されています。撰社とは本社に御縁^{みゆかり}のある神を祀^{まつ}った神社のことで、この撰社には諏訪神社（本社）の祭神「武御名方神」の母神である「須勢理比売命」を祀っています。

前記の「注連縄切由来」の文中には「乳母祖神」と記述されていますが、「乳」は母神を示しており、昔から「乳養の神」として乳不足の母親たちの篤い信仰を受けてきました。

「しめ縄切り」は従来、峠の道路上で行なわれていましたが、平成二十年に現在の「専用斎行場」が造成され、併せて祭具収納舎も新設されました。

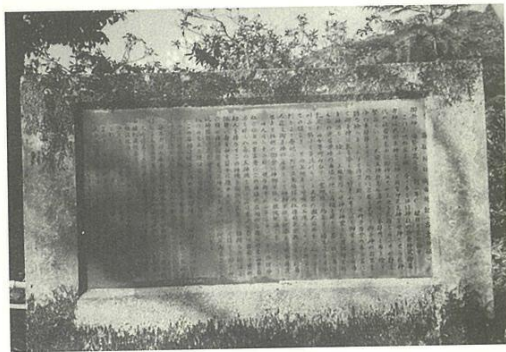
また、この地は往時の杵島・松浦両郷を結ぶ重要な峠路であり、峠の守護神として道祖神（塞^{さい}の神）も祀られ、崇敬されてきました。

一、諏訪神社の「注連縄切り」^{しめなわ}

(1) 神事の由来

このしめなわ切りのことを「臍^{へそ}の緒切り」とも呼んでいます。伝えでは、その昔、ある高貴な婦人が旅の途中、鹿路峠で急に産気づき、男の子を出産しました。その時、村人が御子の臍の緒を切って介抱し、胞衣塚^{えなづか}を建てて祀ったところ、村が大いに繁栄したと伝えられています。御子は成長して神武英才、高德の人となって里人を撫育され、「氏神さまの再来」とあがめられました。

以来毎年、御子の誕生を祝って、胞衣塚（乳道祖神石祠）前に大しめ縄を張り、それを御子の「臍の緒」に見たてて通行人に切ってもらい、五穀豊穰や地区の安全を祈願する神事です。従って、氏神信仰と道祖神信仰の二つが結びついた珍しい習俗として、約二百年にわたって続けられているものです。



乳道祖神の由緒碑

(2) 注連縄切りの実際

この神事は、毎年一〇月二三日、桃川の氏神社（諏訪神社）の秋祭りの宵宮祭で行われるもので、当日は、当番の地区代表がしめ縄を境内に運び入れ、お祓いを受けて神事が始まります。しめ縄作りや神輿担ぎなどは、桃川の四つの地区が四年に一度ずつ輪番で奉仕するように決められています。また、この神事には、由来により桃川の五家が神側家として仕え、今もその子孫が例祭には神前右座に列座し、神社総代も共に参列して、神官の祝詞が奏上されることになっています。

さて、夕刻が近づく、神社でお祓いをしたしめ縄（直径七寸五分：約二五cm）を、神輿と共に奉持し、鹿路峠（旧杵島・松浦郡境、現在の国道四九八号、伊万里、武雄市境）へ向って出発して行きます。



道路にしめなわを張る道切り

神社から一詰あまりの所にある鹿路峠に到着すると、しめ縄を路上に張り「道切り」をします。また、道路の片側には敷物を置いて、作業をしてもらう手筈を整えます。いよいよ本番到来です。

まず、東の方から来る車（昔は東から歩いてくる最初の男性）を呼びとめて、「しめ縄切り」の主役になってもらい、「ご奉仕をたのむならわしになっていました。通行人の中には、「天下の公道をふさいで何事か。」とか「急用だから困る。」と断わる人もあつたりしました。そこで、神事の



いよいよ本番。汗だくの苦闘

由来を説明し「お願いします」と懇願して承知してもらおうこと
もしばしばありました。

中には「こんな目出度いことは願ってもないこと」と幸運を
喜んで主役を引き受けてくれる人もいるほどです。

いよいよ、「しめ縄切り」が始まります。

その昔、御子の急なご出産で、急ぎ「かわらけ（陶片）」（一説では紙こよりも伝わる）で臍の緒を切ったと言う古事にちなんで、使用する鎌はわざと刃をつぶしたものを使います。切り人は、神酒大杯十三杯を重ねながら切りかかりますが、直径二五^{センチ}のしめ縄は、なかなか思うように切れません。

しかし、苦闘することおよそ二〇分、汗だくでやっと切断される、周囲の観衆からは思わず歓声が上がります。祝福と安らぎの雰囲気につつまれてしまっています。このようにして、この奇祭は夕方六時前後に終了し、めでたくお開きとなるのです。